VITALITE インタビュー

貧しき人々とともに生きる

フランシスコ会神父・山谷（さんや）／山里（やまざと）相談室
中谷　功
聞き手：佐多保彦　株式会社 東機貿　代表取締役社長

なかや・いさお
1941年、東京生まれ。フランシスコ会の修道士として、79年、カトリックの司祭に任命される。滞日外国人との関わりを長年続け、85年より日雇い労働者の街・山谷地区にて活動。

佐多：三Kと言われる仕事に従事する外国人労働者のオーバーステイの問題は、不景気とともにますます深刻なようですね。

中谷：ええ。私のところに来る問題の多くは、観光ビザで入国してパスポートもお金もとり上げられて働かされたあげく病気になって、帰国したくてもできないというケースです。ご承知のように日本の入管法には根深い矛盾があります。単純労働者なしでは日本の小企業は成り立ちません。だから入国はさせ、働かせる。しかし労働ビザは与えない。労働者という人間ではなく、単なる労動力ですね。もちろん、病気になってもビザがなければなかなか診てもらえません。病院に行っても、そういうことは福祉問題だからって言われてしまいます。しかし、福祉や国のレベルではビザなし滞在者は存在しない人達ということなんです（苦笑）。

それらの中で、私が長い間関わっている裁判があります。それは日本でおこったフィリピン人どうしの殺人事件で、私は以前フィリピンのスラムで奉仕活動をしていました関係で、この人達の家族に会ったり、また法廷の証言台に立ったこともあります。事件の詳細は省きますが、当地に行ってまず驚いたことはスラム街全体が非常に明るいことです。そして、被害者と加害者の家族が助け合って暮らしていることです。我々には考えられないことでしょう。子供が走り回って遊んでいます。つらい仕事をしても、皆いきいきと暮らしています。その姿には何か熱気と活力を感じます。私はそれを見て、貧しさは人と人の垣を取り払う、と思いました。そういうことは、サンパウロ、リオデジャネイロ、リマ等でも同じです。

佐多：しかし、今の日本では貧しさと明るさとは同居しませんね。

中谷：ええ。山谷や釜ヶ崎はスラムとは言えませんが、実際、暗い印象がありますね。それは何故なのか。僕はここに来て、人間として一番みじめなのは、希望を失った人だと気がつきました。山谷に住む人に家族はいません。かつてはいたんでしょうが、今はほとんど一人です。ひとりぼっちの寂しさ、それが暗さになっていると思います。別の言い方をすれば、生きがいがないとも、また“待っていてくれる人”がないと言ってもいいでしょう。

今日の仕事が大変でも、「お帰りなさい」と迎える人がいる。病気になっても「早く良くなってね」と見舞ってくれる人がいる。そういうことが明日生きる力につながっていくんです。ところがここでは、働いて何十万円と稼いだとしても、だれも喜んでくれません。「どうなってもいい」という心境は空しいものです。「誰か俺の話を聞いてくれ」って、お金をあげたりお酒を飲ませる。しかしそれっきりです。そういう意味では彼らのほうがお金の限界を知っている。つまり、掛値なしの人間の価値を知っているかも知れません。

佐多：そのようなことは、山谷に限らず、現代人の病とも言えますね。

中谷：そのとおりです。多くの先進国の社会の貧しさでしょうね。豊かになった反面、個人主義の悪い面が出て、人を信じることができないんですね。愛

されない経験をすると、人を愛せない。例えば結婚しても壊してしまう。

私は府中刑務所などの教誨師もしていますが、彼らの中には「出所するのが怖い」と言う人がいます。社会に出ると差別が待っているからです。いくら一生懸命働いても、刑務所に入っていたことがばれると辞めさせられてしまうのです。差別は必ずしも悪意から出るとは限りません。善意をもっていてもおこります。彼らはもうわかっているのです。彼らは“落ちこぼれ”というより被害者です。山谷はこのような人達が生きていけるところです。前歴を問われませんから。

佐多：レッテルを貼って、人を許さない社会は競争の産物ともいえますね。子供の自殺がでるような社会は、もう異常ですね。

中谷：競争に勝つことが人間の価値ではなく、存在していること自体に人間の価値があります。そこにいるだけで意味があると、人に大切に思われることが、人間にとって幸せであり生きる希望だと思いますね。具体的には家族に限らず、喜びや悲しみを共にしてくれる人間関係だと思います。

佐多：なるほど、人間関係のぬくもりこそ生きる力（生命力)、ということでしょうか。

ところで、中谷神父ご自身のことをお尋ねしますが、修道士になられたきっかけを教えていただけますか。

中谷：私は北梅道の美幌でオランダ人神父により洗礼を受けました。非常に人間的な人でした。純粋な高校生だったので、社会の矛盾に悩み、いろいろ勉強していくうちに、ある言葉に出会ったのです。それは「友のために命を捨てるほど大きな愛はない」「心を尽くし魂を尽くして神を愛しなさい」「自分と同じように隣人を愛しなさい」という言葉です。ガーンときました。一種の恋愛のようなものです(笑)。

しかしフランシスコ会はもっと、清貧を求める本来の姿に戻るべきだと思います。キリスト教は少数派であったほうが、心の問題を追及するという自分のアイデンティティを保てる。多数派というか、体制派になると駄目になってしまう。それはあるいは人間性に潜むものかもしれませんが。

佐多：そうですか。すると、フランシスコ会のアイデンティティを求めて、フィリピンでの奉仕活動をされ、その後、山谷に入られたわけですね。

中谷：そうです。八年になります。さきほどの人間関係の話は、ここに住むようになって特に強く感じたことです。

この地域全体で、だいたい一万人の日雇い労働者が簡易宿泊所に泊まっていますが、今、不景気のために仕事がなく、一日千円の宿泊費が払えずに、四～五百人が路上や公園で寝起きしています。彼らは年々高齢化し、平均年齢が五十才程度と言われています。麻薬などはまだありませんが、アルコールは大きな問題です。

この山里相談室は、教会などに来ることもできない人達のために、“出かけていく”相談室にしていきたいと考えています。私は週一回ミサをし、ボランティアの人達と共に、週二回夜回りして、おにぎりなどを配っています。

毎年、寒さのために凍え死ぬ人が二百人近くもいるんですが、今年は増えることが心配されています。夜回りの時に、ガタガタとふるえている老人に毛布を差し出します。すると、「ありがとう。でも俺よりあいつのほうが困っているから、あいつにやってくれ」って、他人(ひと)のことを気づかうんです。どうして言えるんですか、そんなことが……。自分が明朝死ぬかも知れないのに。私にはわかりません……。

山谷を美化するつもりはありません。しかし山谷に関わって、「福音」が真実だと、もう少し信じられるようになりました。今までいくら勉強してもわからなかったのに……。そういったことが私にとっては大きな喜びです。

※お問い合わせは下記に

山里相談室：〒111東京都台東区清川2-18-22
Tel：03-3871-7382